

短大特任教員教育研究業績書

平成 30 年 5 月 7 日

氏名	ふりがな	所属	職位	性別
中村 昭彦	なかむら あきひこ	保育学科 通信教育課程	教授・准教授・講師・ 助教	⊙・女
担当科目名				
音楽表現 IA 音楽表現 IB				
学 歴				
和暦(西暦)年 月	事 項		学位	
平成 26 (2014) 年 3 月	群馬大学教育学部音楽専攻 卒業		学士(教育学)	
平成 29 (2017) 年 3 月	東京学芸大学大学院教育学研究科音楽教育専攻 修了		修士(教育学)	
平成 30 (2018) 年 4 月	東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科 学校教育学専攻芸術系教育講座 入学			
教育歴・職歴				
名 称	期 間	教育内容又は業務内容		
東京学芸大学 教育学部初等教育教員養成課程	平成 26 年 4 月～平成 26 年 7 月	ティーチングアシスタント「音楽科研究 I」担当		
東京未来大学 子ども心理学部子ども心理学科	平成 27 年 4 月～平成 28 年 3 月	ティーチングアシスタント「音楽実技」担当		
城北埼玉中学・高等学校	平成 27 年 9 月～平成 28 年 3 月	非常勤講師「音楽」担当		
日本女子大学 家政学部児童学科	平成 27 年 9 月～平成 29 年 3 月	非常勤助手「音楽実技 2」担当		
東京都港区立芝浦小学校	平成 27 年 9 月～平成 29 年 3 月	非常勤講師「音楽」担当		
東京成徳大学 子ども学部子ども学科	平成 29 年 4 月～現在に至る	非常勤講師「基礎音楽 I」「基礎音楽 II」各担当		
小田原短期大学	平成 29 年 4 月～現在に至る	保育学科通信教育課程 助教 「音楽表現 IA」「音楽表現 IB」各担当		
所 属 学 会 等				
名 称	活動期間	活動内容(役職等の活動を含む)		
日本音楽教育学会	平成 28 年 5 月～現在	会員		
音楽学習学会	平成 28 年 7 月～現在	会員		
教育目標・評価学会	平成 29 年 5 月～現在	会員		
京都大学大学院教育学研究科 E.FORUM	平成 29 年 5 月～現在	会員		
日本教科教育学会	平成 29 年 5 月～現在	会員		
日本カリキュラム学会	平成 29 年 5 月～現在	会員		
社 会 活 動 等				
名 称	活動期間	活 動 内 容		
あずまコールさざんか	平成 29 年 4 月～現在	合唱指揮者		

担当教科目に関する資格・免許等				
名称	取得年月	取得機関		
小学校教諭専修免許状	平成 29 年 3 月	東京都教育委員会		
中学校教諭専修免許状 (音楽)	平成 29 年 3 月	東京都教育委員会		
高等学校教諭専修免許状 (音楽)	平成 29 年 3 月	東京都教育委員会		
研究実績に関する事項				
代表的な著書、論文等の名称	単著 共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	概要
(著書) 1. 【フレキシブル 6～8パート】ルーマニア民族舞曲 (編曲)	単著	平成 29 年 8 月	ブレーン株式会社	ハンガリー出身の著名な作曲家でもあり、民族音楽研究者でもあったベーラ・バルトーク (1881-1945) は、生涯に渡って民族音楽の収集・分析を行った。エルネ・レンドヴァイ著『バルトークの作曲技法』に代表されるように、「黄金比」「フィボナッチ数列」などの数学的なアプローチから難解な音楽語法を作り上げたが、本作は複雑な書法が見られず、ルーマニアの民謡を生かした親しみのある楽曲となっている。今回は木管のフレキシブル・アンサンブルとして編曲した。パート数が6～8パートとなっていて、パート1とパート8は省略可能になっている。今回の編曲で一番意識した点は、パート5～8を楽器経験の少ない方でも演奏できるようにした点である。
2. 『「スタンダード作り」基礎資料集』(第2集) pp. 166-169	共著	平成29年 9 月	京都大学大学院教育学研究科E. FORUM	本資料集では、E. FORUM会員である教員の実践や政策・研究の動向などを踏まえつつ、各教科における重点目標とは何かを探り、包括的な「本質的な問い」・「永続的理解」を提案するとともに、パフォーマンス課題を例示している。今回は小平市立上宿小学校、半野田恵教諭によって実践された授業「いろいろな音階を使って音楽をつくろうⅡ～音階からきりとった音で～」を紹介し、「本質的な問い」・「永続的理解」、パフォーマンス課題を例示した。また、音楽づくりの評価における評価基準の妥当性・信頼性の検討も行った。
(学術論文) 1. 子どもがつくった音楽作品の質的評価に関する研究—音楽科におけるルーブリックの提唱—	単著	平成 29 年 3 月	東京学芸大学大学院 修士論文	教育評価に関する先行研究を整理し、「パフォーマンス評価」の意義を明らかにした。そして、小学校の教科書分析を行い、記載されている音楽づくりの活動の分類と、指導書に記載されている評価内容の分析を行い、学習指導要領の改訂による内容の変化を比較した。その結果、音楽づくりの各活動と評価内容の関係が明らかになった。その結果をもとに、音楽づくりにおける評価規準を作成した。対象は、平成 26 年度東京都小平市立上宿小学校第 6 学年の音楽作品で、15 人の評価者に評価をさせた。その結果をもとに、分散分析による評価基準の妥当性・信頼性の検討と、一般化可能性理論による評価者の評価観の解明を行った。
2. ライトモチーフをもとにした音楽づくり—太宰治 原作「走れメロス」の物語に音楽をつける— (査読なし)	単著	平成29年12月	新しい音楽教育を考える会 『音楽の授業づくりジャーナル 第1号』	2016年日本女子大学で開催された「新しい音楽教育を考える会」において行ったワークショップをまとめたものである。本ワークショップでは以下の2点を目的とした。 ①打楽器による効果音だけではなく、モチーフによって物語に音楽をつける。 ②1つのモチーフを変奏・展開させることによって、作品に統一感を持たせる。

<p>(その他)</p> <p>1. A Mysterious Bell～木管五重奏のための「神秘的な鐘」～ (作曲)</p>	単著	平成26年4月	東京国際芸術協会 第15回TIAA全日本作曲家コンクール 審査員賞受賞	アレクサンドル・スクリャービンが多用了「神秘和音」を駆使して作曲した。曲の随所に出てくるファゴットとホルンによる和音が鐘の音を表している。調性のある箇所と無い箇所が交互になっており、鐘の音と神秘和音は調性の無い箇所が使われている。調性のある箇所では、中間部の叙情的な旋律が聴きどころである。
<p>2. ホルンとピアノのための「ノスタルジア」 (作曲)</p>	単著	平成26年10月	伊勢崎市音楽協会 フレッシュ・ふれあいコンサート 第4回	私の出身地である群馬県伊勢崎市の、音楽文化、地域振興のために出演を依頼された。曲はノスタルジックな雰囲気を出す近代的な和声進行で、ミニマル的な要素も取り入れ展開していく。
<p>3. ユーフォニアム・チューバ四重奏「風の便り」 (作曲)</p>	単著	平成27年7月	東京学芸大学ユーフォニアム・チューバアンサンブル 「SUKI-YAKI」	私の出身である東京学芸大学のアンサンブル団体から委嘱を受けて作曲した。曲は4つのそれぞれのパートが、入り乱れ、掛け合いながら展開していき、スピード感、疾走感のある楽曲となっている。
<p>4. 金管バンドのための「アドベンチャーワールド」 (作曲)</p>	単著	平成27年8月	2015年第57回 群馬県吹奏楽コンクール 群馬県太田市立旭小学校	太田市立旭小学校からの委嘱を受け、吹奏楽コンクールのために作曲した。演奏者が小学生であることと、コンクール曲ということを考え、一人ひとり比較的に簡単であるが、全体としては聴き映えがするように作曲した。
<p>5. サウンド・オブ・ミュージックメドレー (編曲)</p>	単著	平成28年5月	おおた管弦楽団 「リジョイス」 第5回定期演奏会	おおた管弦楽団「リジョイス」からの委嘱で編曲した。まだ発足間もない団体で、初心者も多く、オーケストラでは一般的には無い3rd ヴァイオリンを設定して、初心者でも弾きやすいパートを設定した。メドレーの内訳は、「プレリュード」「サウンド・オブ・ミュージック」「もうすぐ17歳」「私のお気に入り」「ドレミの歌」「一人ぼっちの羊飼ひ」「エーデルワイス」「すべての山に登れ」である。
<p>6. フルート三重奏「鳥たちの音風景」 (作曲)</p>	単著	平成28年7月	群馬県立太田東高等学校吹奏楽部 第27回定期演奏会	太田東高等学校吹奏楽部からの委嘱で作曲した。3楽章構成であり、第1楽章「森を駆けるツバメ」は、ツバメを表したスピード感のある曲調や、各パート間での旋律の移り変わりが特徴的である。第2楽章「木漏れ日の小鳥たち」は、変拍子の主題によって曲が進んで行き、突如小鳥の鳴き声を模写する。そして、第3楽章「空を駆ける大鷲」では、軽やかなリズムと明るい旋律でフィナーレを迎える。
<p>7. ライトモチーフを元にした音楽づくり-太宰治原作「走れメロス」の物語に音楽をつける-(口頭発表)</p>	単独	平成28年8月	Icmac(新しい音楽教育を考える会)	このワークショップでは、「ライトモチーフ」を元にした音楽づくりを提案した。活動の全容は、太宰治原作「走れメロス」の物語に音楽をつけるというものである。目的は、①打楽器による効果音だけではなく、モチーフによって物語に音楽をつけることと、②1つのモチーフを変奏・展開させることによって、作品に統一感を持たせることである。
<p>8. 子どもがつくった音楽作品の質的評価に関する研究-音楽科教育におけるルーブリックの提唱-(ポスター発表)</p>	単独	平成28年10月	日本音楽教育学会第47回大会(横浜大会)	思考力・判断力・表現力といった高次の学力の様相を捉えるために、子どもがつくった音楽作品の質的評価に関する研究を行った。評価のためのルーブリック(評価基準)を作成する前段階として、小学校の教科書の分析を行い、音楽づくりの活動の分類と、それぞれの活動における評価の観点と評価基準の分析を行った。
<p>9. 子どもがつくった音楽作品の評価に関する研究-音楽科における評価基準の妥当性・信頼性の検討-(口頭発表)</p>	単独	平成29年10月	日本音楽教育学会第48回大会(愛知大会)	本研究の主目的は、子どもの音楽作品の評価メカニズムを解明することである。具体的には、総括的評価として完成作品を評価する際に使用する評価基準について、その妥当性の検討(目的1)と信頼性の検討(目的2)を行う。また、一般化可能性理論(分散分析モデル)を用いて、評価者の評価観の解明(目的3)を行う。以下、1～3の目的ごとに研究方法を示す。 (目的1の方法) 作品の質の高さの要因×評価者の要因で、評価結果を基に、それぞれの評価基準の繰り返しのない2要因分散分析を行い、各要因の主効果を求める。

				<p>(目的2の方法)</p> <p>評価規準全ての2要因分散分析の結果から、各規準の信頼性係数 (α係数) を推定する。</p> <p>(目的3の方法)</p> <p>一般化可能性理論を用い、作品×評価者×項目の3要因配置モデルのもと変動要因間の分散成分の推定値を算出する。</p>
その他 (表彰等)	平成 26 年 4 月	東京国際芸術協会第 15 回 TIAA 全日本作曲家コンクール室内楽部門審査員賞受賞		